目白大学　総合科学研究
９号　2013年３月　31－43



# 児童養護施設における職員と子ども達の「『ホッ』とできる」場のイメージ

## ―児童養護施設における子どもと職員の関係づくりの場の研究１―

# Images of “places to be relieved at” by staffs and children living in the children’s home

## ―A study on places of constructing the relationship between children and staffs in the children’s home―

杉本　範子
（Noriko SUGIMOTO）

**Abstract :**

This paper aims to make clear places of constructing the relationship between children and staffs in the children’s home. The method utilized was question are survey with the photograph language; children and staffs took photographs related “places to be relieved at” and wrote about the reason.

As results of this study, I conclude:

1) that children image “places to be relieved at” in their room and “dining-room and sitting room”;
2) that staffs are asking for “places to be relieved at” in “sitting room and a dining-room” and various places in institutions.;
3) that it is important for staff to be freedom from work or the place and time to be alone as its conditions.;
4) that to make relations between children and staffs. It is indispensable that staffs spend it together and share the time with children in the “sitting room and dining-room” as a place.

**キーワード**：児童養護施設、「ホッ」とできる、写真言語、関係構築

**Keywords**：children’s home, places to be relieved at, photograph language, constructing the relationships

### １　研究の背景と目的

戦後の孤児収容が出発点であったわが国の児童養護施設は児童福祉法（1948年）に基づいた「集団主義養護」(注1) が中心であったが、近年の児童虐待の増加から、2004年の児童虐待の防止等に関する法律の改正、児童福祉法の改正をへて、これまでの「集団主義養護」が見直され、ケアの個別化・ケア単位の小規模化が国の施策となった(注2)。

筆者は、子ども達と職員が、施設にそれぞれの居場所を得ることが、子どもと職員の関係づくりの基本と考える。というのも、職員が施設に居場所を感じて生活していれば、子ども達は安心という「見守り」を感じるようになる。そして、元Ｚ園保育士の言葉であるが「子どもが、花でも１本飾るようになればしめたもの」は、

すぎもとのりこ：非常勤講師

子ども自身、施設に愛着を感じ、居場所を感じることが「花でも１本飾る」行為になることを言い表している。すなわち職員と子ども達がそれぞれ施設という場に安心して生活することは、お互いの存在を認め、お互いの関係を形成しやすくなり、児童養護施設の働きである子育て、職員と子どもの愛着関係が成立しやすくなると考える。本研究は、このような視点から、職員と子ども達の関係づくりがしやすい養育環境の場のあり方の環境要素を明らかにし、今後の施設計画の一助となることを目的とする。

## ２　本研究の位置づけ

児童養護に関する先行研究は、発達心理学分野での施設に居住する子ども達の親との愛着形成の欠如からくる発達障害に関する事例研究[(5)]や、教育心理学での施設虐待を受けた子ども達の症状の分析[(6)]、社会福祉では施設内虐待をテーマにした子ども達の人権を扱った研究[(7)]がある。建築分野では、児童養護施設を空間形態で類型化した研究[(8)]、子ども達の居場所や環境の変化が仲間との交流に与える影響に関する研究[(9)][(10)]、職員がイメージする子ども達の養育環境に関する研究[(11)]があるが、子ども達とスタッフとの関わりに着目した研究はみられない。

## ３　研究の概要

### ３－１　研究の方法

本研究では、職員と子ども達の関係づくりがしやすい養育環境の場のあり方の環境要素を明らかにするために、彼らが居場所をどのようにイメージしているのかを明らかにした。調査方法は、写真投影法[(注4)]の応用として、「居場所」を感じていることを表現する言葉の概念「『ホッ』とできる」と「思われる」・「思われない」のイメージを撮影してもらい、その理由についてコメントしてもらう形である。写真は手持ちのもの、新たに撮影したものでも問わない。

この調査手法は、抽象概念を提示した場合に撮影された写真の内容を分析することにより、撮影者の保持するイメージを考察する手法[(注5)]である。写真によるイメージ表現は、具体的な実像として捉えることができるという利点がある。

調査対象施設は、事前に文書で調査依頼をして許可を得た３施設である。指定された日時に、訪問調査を行った。その際、施設長に施設環境、ケア体制などの聞き取りをした。

分析は撮影された写真とコメントの内容を中心に、子どもと職員の意識の差や共通点、両者の物理的・心理的位置関係について考察した。

### ３－２　研究の倫理的配慮

回答者の意思を尊重するために、調査を始めるにあたって、写真公表の可否を問い、記述にあたっては、対称施設の特定を避けるため、施設名の公表はしていない。また、本論は写真掲載をしていないが、掲載の場合は、個人が識別できないように、画像処理を行うことにする。

### ３－３　調査対象施設の概要

調査対象の３施設の特徴を述べる。Ｘ園は定員50人、基本的に大舎制の施設であるが、本館を第１（女子）と第２（男子）の２つのグループにわけ、それぞれに台所・居間・浴室を備え、子ども達の居室は個室ないしは２～３人部屋であった。それぞれのグループを４人、３人の担当職員で担当している。新館は男女混合の幼児フロアと学童フロアに分かれた大舎のスタイルで職員７人が担当している。園庭の垣根越しに地域小規模グループホームがあり、職員３人が担当している。すなわち、１運営施設の中で多様な養育体制をとっているのが特色である。

Ｙ園は定員65人のところ、現在57人が在園している。大舎制の施設である。幼児寮は職員６人、学童寮は職員９人で担当している。同一敷地内に１小規模グループホームがあり、担当職員は３名である。学童寮は男女で二分され、さらに、小学生と中・高生に分かれ、中庭を囲んで生活する。

Ｚ園は60人の子ども達が、敷地内に点在する６つの小舎に、男女混合で幼児から高校生まで一緒に居住する。本園から1.5kmの所に地域小規模グループホームがあり、３人の担当職員が配置されている。各小舎は広い吹き抜けのリ

ビングを囲むように子ども達の２～４人の共用の居室が１・２階に配されている

それぞれの施設のケア体制、つまり、子ども達と担当職員数、および施設の成り立ちなどの特色を表１に、それぞれの配置図を図１に示す。

表１　調査対象施設の特色

| | 定員 | グループ名 | 園児数 | 職員数 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| X 園 | 42 | 本館 1G | 10 | 4 | 昭和 25 年認可を受け、27 年社会福祉法人。大舎制。幼児部と学齢児の 3 グループ、園庭隣りにある地域小規模グループホームの養育体制。 |
| | | 本館 2G | 5 | 3 | |
| | | 新館幼児 | 8 | 7 | |
| | | 新館学童 | 13 | | |
| | | 地域小規模グループホーム | 6 | 3 | |
| | | その他 | | 5 | |
| | 計 | | 42 | 22+ 補助 8 | |
| Y 園 | 65 | 幼児寮 | 18 | 6 | 明治 32 年始まり、40 年財団法人、昭和 27 年社会福祉法人。大舎制で、園庭続きに小規模グループホーム施設 1 棟。幼児寮、男女別 |
| | | 学童寮小学生 | 24 | 6 | |
| | | 学童寮中高生 | 9 | 3 | |
| | | 地域小規模グループホーム | 6 | 3 | |
| | | その他 | | 12 | |
| | 計 | | 57 | 30+ 補助 8 | |
| Z 園 | | 1 ホーム | 11 | 2 1 | 1948 年開園、1949 年養護施設として認可、小舎制養護を実践。1991 年全面改築。1 ホーム 10 名の 6 ホームと 1 地域小規模グループホーム、幼児から高校生の男女混合の養育体制 |
| | | 2 ホーム | 8 | 2 | |
| | | 3 ホーム | 10 | 2 1 | |
| | | 4 ホーム | 8 | 2 | |
| | | 5 ホーム | 9 | 2 1 | |
| | | 6 ホーム | 9 | 2 | |
| | | 地域小規模グループホーム | 5 | 3 1 | |
| | | その他 | | 8 | |
| | 計 | | 60 | 31+ 補助 4 | |

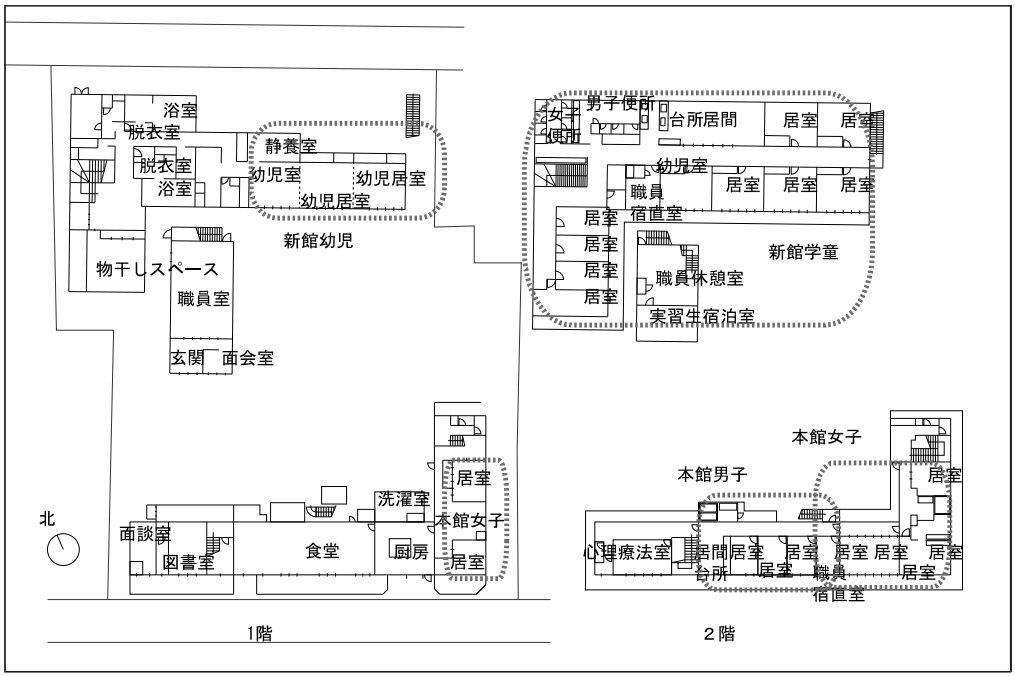


図１－１　Ｘ園簡略配置図

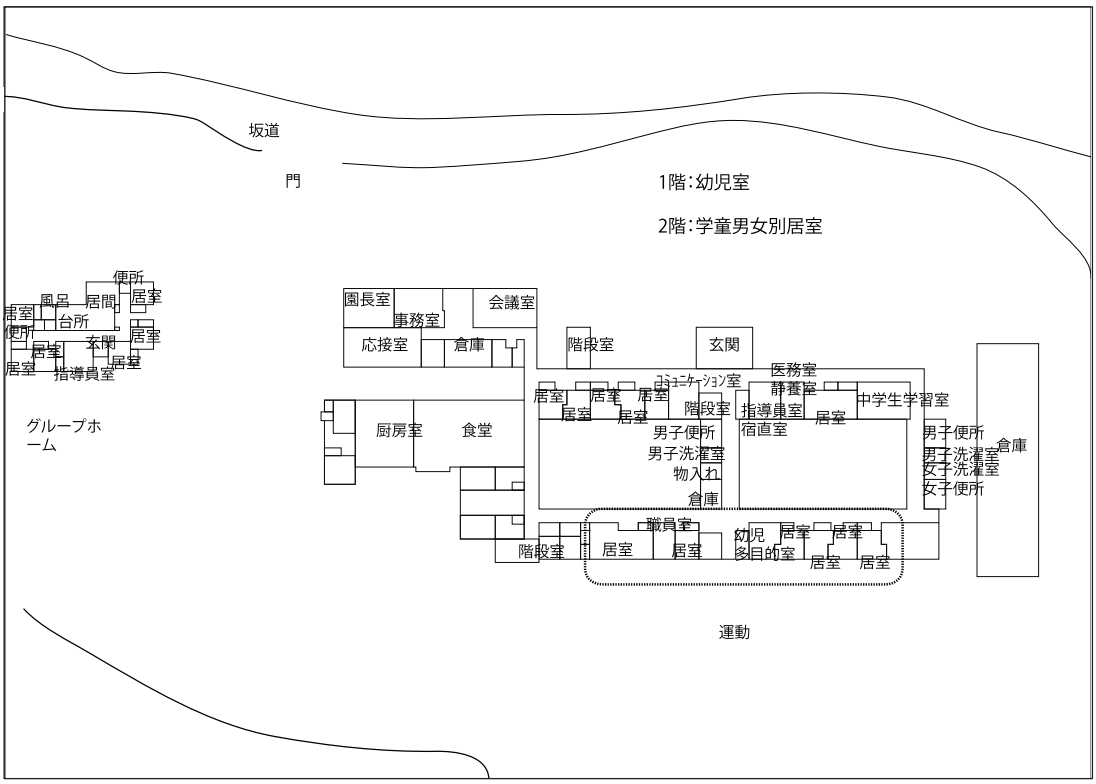


図１－２　Ｙ園簡略配置図

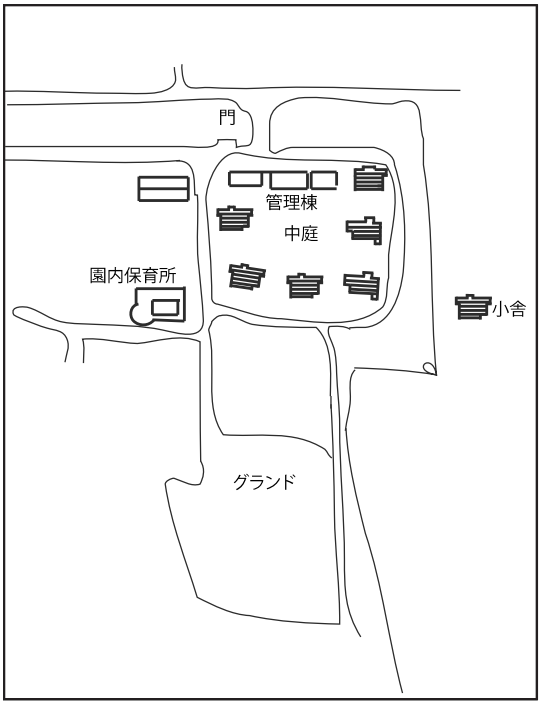


図１－３　Ｚ園簡略配置図

## ４　調査結果と分析

### ４－１　回答者の属性

今回の調査では、子ども44人、職員35人から回答を得た。そのうち否定的回答は子ども２・職員１、写真がなく、コメントのみの回答は子ども２・職員１であった。回答者の施設別属性を表２に示す。子ども達の平均在園年数は、Ｘ園が４年８ヶ月、Ｙ園が７年、Ｚ園が７年５ヶ月であった。兄弟姉妹がいない子どもは、Ｘ園が17人中４人、Ｙ園が13人中８人、Ｚ園が14人中９人であった。兄弟姉妹と共に措置されている子ども達が44人中23人（52.3％）、５年以上在籍する子ども達は44人中29人（65.9％）を占めていた。兄弟姉妹ともに一緒で中長期的に措置されている子ども達が多いことがわかった。

職員の現施設での平均勤務経験年数（前数字）と平均年齢（後数字）は、Ｘ園が７年５ヶ月・38.3歳、Ｙ園が７年５ヶ月・39.9歳、Ｚ園が７年４ヶ月・28.3歳であった。また、他施設での経験はＸ園が12人中３人、Ｙ園が13人中６人、Ｚ園が10人中１人、勤務先は、児童養護施設、保育園、障害者施設であった。つまり、職員は現施設での勤務期間は７年余、35人中10人（28.6％）、つまり、ほぼ４人に一人は他施設での経験があることになる。

### ４－２　写真の分析

#### ４－２－１　撮影された場所

「『ホッ』とできる」と「思われる」場を撮影した写真がほとんど（92.4％）で、「『ホッとできる』と「思われない」の回答の写真は、Ｙ園の保育士１とＺ園の子供２で、写真のない回答はＸ園の保育士１とＸとＹ園の子ども計２であった。施設ごとに写真に表現された場所を否定回答も含めて分類したものを図２に示す。

Ｘ園の子ども達のほぼ半数（53％）が自分たちの「居室」で、次は23.5％の「その他施設内空間」を写真にしていた。子ども達の「居間（食堂）」の選択が他の施設に比べて少なかった（17.6％）一方で、職員の大半（66.8％）が写真にしていた。Ｘ園の子ども達と職員の「『ホッ』

表２　回答者の属性―職員

| | | 年齢 | 現施設での勤務経験 1年未満 | 1～5年未満 | 5～10年未満 | 10年以上 | 保有資格 | 他施設での勤務経験 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| X園（12人） | 児童指導員 | 32 | | | F | | 1/3/9 | 1(9) |
| | | 24 | | F | | | 1 | 2 |
| | | 38 | | | | M | 3/4/9 | 2 |
| | 保育士 | 54 | | | | F | 2 | 1(1/5/9) |
| | | 27 | | M | | | 2 | 2 |
| | | 23 | | F | | | 2 | 2 |
| | | 31 | | F | | | 2 | 1(5) |
| | | 27 | | | F | | 2/3/10 | |
| | | 65 | | | F | | 10 | 2 |
| | 調理師 | 58 | | | F | | 10 | 2 |
| | | 51 | | F | | | 10 | 2 |
| | 栄養士 | 29 | | | F | | 8 | 2 |
| Y園（13人） | 児童指導員 | 35 | | M | | | 4 | 2 |
| | | 29 | | M | | | 9/10 | 2 |
| | | 33 | | M | | | 4 | 2 |
| | 家庭支援専門相談員 | 47 | | | | F | 4/9 | 2 |
| | 保育士 | 50 | | | F | | 2 | 1(5/9) |
| | | 50 | | | | F | 2/3/4 | 1(9) |
| | | 29 | | F | | | 2 | 1(5) |
| | | 50 | | F | | | 2 | 1(5) |
| | 心理士 | 29 | | F | | | 5 | 2 |
| | 調理師 | 57 | | | | F | 10 | 2 |
| | | 34 | | F | | | 8/10 | 1(9) |
| | 栄養士 | 27 | | F | | | 8 | 2 |
| | 事務職員 | 49 | | | | F | 2/10 | 1(5) |
| Z園（10人） | 児童指導員 | 34 | | M | | | 3 | 2 |
| | | 38 | | M | | | 3 | 1(9) |
| | | 27 | | M | | | 3 | 2 |
| | 保育士 | 26 | | F | | | 2 | 2 |
| | | 29 | | | F | | 2 | 2 |
| | | 29 | F | | | | 2 | 2 |
| | | 22 | | F | | | 2/10 | 2 |
| | | 21 | F | | | | 2/10 | 2 |
| | | 24 | | F | | | 2 | 2 |
| | 事務職員 | 33 | | | F | | | 2 |

表３　回答者の属性―子ども

| | 学年 | 在園期間 1年未満 | 1～5年未満 | 5～10年未満 | 10年以上 | 兄弟姉妹の存在 | 他の施設にいた経験 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| X園（17人） | 小5 | | M | | | 1(1) | 2 |
| | | | M | | | 2 | 2 |
| | 小6 | | M | | | 1(3) | 2 |
| | | | | F | | 1(2) | 2 |
| | | | | F | | 1(1) | 2 |
| | 中1 | F | | | | 2 | 2 |
| | | | | F | | 1(1) | 2 |
| | 中2 | | | F | | 2 | 2 |
| | | | | M | | 1(1) | 2 |
| | 中3 | | F | | | 1(2) | 2 |
| | | | | M | | 1(2) | 2 |
| | | | F | | | 1(1) | 1 |
| | 高1 | | | F | | 1(2) | 2 |
| | | | M | | | 1(2) | 2 |
| | | | | F | | 1(1) | 2 |
| | 高2 | | | F | | 2 | 1 |
| | 高3 | | | M | | 1(1) | 2 |
| Y園（13人） | 小5 | | F | | | 1(2) | 2 |
| | | | F | | | 1(2) | 2 |
| | | | F | | | 2 | 2 |
| | 小6 | | | | F | 2 | 2 |
| | | | F | | | 2 | 2 |
| | | | | M | | 1(2) | 2 |
| | 中1 | | | | M | 2 | 2 |
| | | | M | | | 1(1) | 2 |
| | | | | | M | 2 | 2 |
| | 中3 | | | M | | 1(1) | 2 |
| | 高1 | | | F | | 2 | 2 |
| | 高3 | | | | F | 2 | 2 |
| | | | | | M | 2 | 2 |
| Z園（14人） | 小5 | | | M | | 2 | 2 |
| | 小6 | | | F | | 2 | 2 |
| | 中1 | F | | | | 2 | 2 |
| | 中2 | | | M | | 1(1) | 2 |
| | 中3 | | F | | | 1(1) | 2 |
| | | | | | F | 1(3) | 2 |
| | 高1 | | | M | | 1(2) | 2 |
| | 高2 | | | F | | 2 | 2 |
| | | | | | M | 2 | 2 |
| | 高3 | | | M | | 2 | 2 |
| | | | | M | | 2 | 2 |
| | | | | | F | 1(1) | 2 |
| | | | | | M | 2 | 2 |
| | | | M | | | 2 | 2 |

**表注**

［職員］

**性別**：M 男性、F 女性

**保有資格**：１社会福祉士、２保育士、３社会福祉主事任用資格、４教師、５心理士、６准看護師、７保健士、８管理栄養士・栄養士、９児童指導員、10 その他

**他施設にいた経験**：１あり（１児童養護施設、５保育園、９児童指導員）、２なし

［子ども達］

**性別**：M男性、F女性

**兄弟姉妹の存在**：１あり（人数）、２（なし）

**他の施設にいた経験**：１あり、２なし

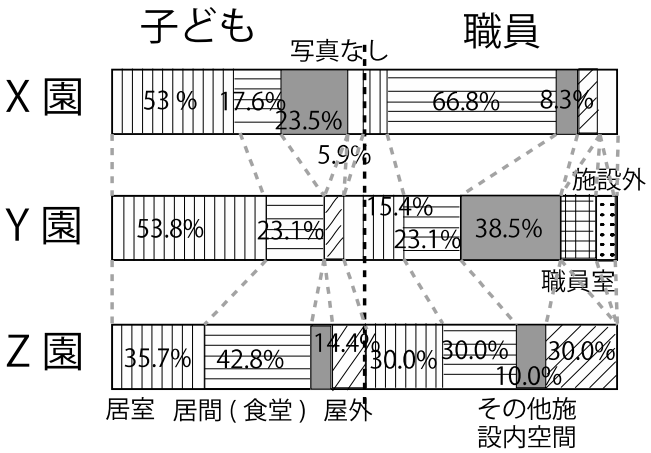


図２　施設別「『ホッ』とできる」と「思われる」・「思われない」場所

とできる」イメージの場は、「居室」と「居間（食堂）」で異なっていた。

Ｙ園の子ども達の半数（53.8％）は自分たちの「居室」を、次は23.1％の「居間（食堂）」であった。一方、他の施設ではみられない「職員室」を写真にした職員２を含めるとＹ園の職員の半数（53.9％）が施設内の諸空間を写真にしていたことが特徴的であった。そのうちの１人は「落ちついて用をたせない」のコメントで「トイレ」の物理的難点を指摘した否定的回答であった。

Ｚ園は、否定的回答を含め、42.87％の子ども達が「居間（食堂）」を、「居室」を写真にした子どもは他の施設の半分の28.6％であった。否定的回答２のうち一つは「居間」のコンクリート打ち放しの天井の「寒々しさ」を、もう一つは相部屋の「居室」のことを指摘していた。一方、職員は、「居間」と「居室」（ともに30％）、「屋外」20.0％であった。Ｚ園の子ども達と職員ともに、「『ホッ』とできる」場を「居間（食堂）」と「居室」あわせてほぼ６割を占めていた。

「『ホッ』とできる」場を、３施設とも、子ども達は「居室」と「居間」に、職員は「居間」などの共用空間にイメージしていたことがわかった。但し大舎の形態であるＹ園が他の施設に比べて「その他の施設内空間」の割合が特に多かった。

### ４－２－２　撮影された「行為」など

図３は、施設毎に「『ホッ』とできる」と「思われる」・「思われない」とイメージされた写真に表現された「行為」を分類したものである。

Ｘ園の子ども達は、テレビを見る、読書、アイドルの写真に見入る姿などの「子どもの様子」（41.2％）と「居室」にあるベッドや机の周りの様子の「物理的環境」（47％）を写真にしていた。一方、職員の半分（50.1％）が「子どもの様子」を表現していたが、食事の準備を職員と子ども達が一緒にしている姿「子どもと一緒」（33.3％）の「行為」も多かった。Ｘ園は職員と子ども達共に「子どもの様子」が多かったことが共通であった。

Ｙ園の子ども達は「行為」よりは部屋の扉の様子を写真にしたことにみられるように「物理的環境」、特に物でイメージし、それは61.5％を占めた。この割合は他の施設と比べると1.3～1.7倍であった。一方、職員の特徴は、「子ども達の様子」が特に少なかったことと職員一人の行為や職員同士の話合いの「職員のみ」（23.1％）は、他の施設にはない回答であった。Ｙ園の子どもと職員の共通点は、「物理的環境」が多かったことである。

Ｚ園の子ども達は「子どもの様子」と部屋や風呂場の様子などの「物理的環境」（否定的回答を含む）がそれぞれ35.7％を占めていた。職員は子どもに読み聞かせをしている写真の「子ど

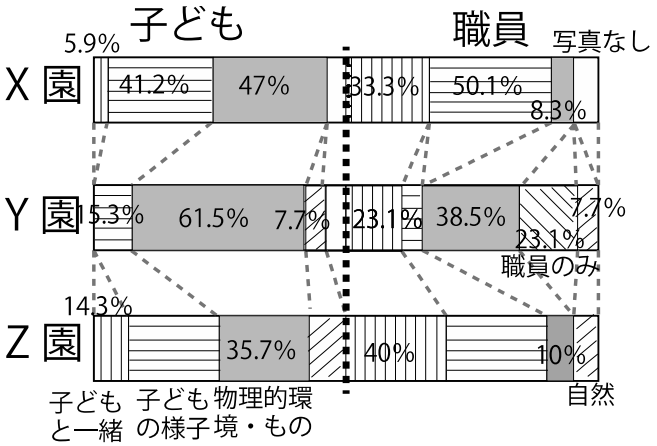


図３　「『ホッ』とできる」と「思われる」・「思われない」「行為」など

もと一緒」と子どもが安心して寝ている姿「子どもの様子」がそれぞれ40%であった。Z園の子どもと職員の共通点は「子どもの様子」であった。

３施設の共通点は子ども達の大半が自分達の環境や身近な周りの物である「物理的環境」を、職員はケアの対象である「子どもの様子」や「子どもと一緒」の行為をイメージしていたのが明らかになった。また、X園とZ園の子ども、職員それぞれの行為結果が類似していることが伺えた。

### ４－３　コメントの分析

回答者のコメントから得られたキーワードを、「好きなことをする」、「子ども（職員）と共に」、「一人」、「物理的環境」、「時」に分類したものを図４に示す。

X園の子ども達は、それぞれの場でギターを弾いたり、ゲームをしたりして自分の「好きなことをする」（53.6%）行為と「一人やから」、「静かだから」などのコメントで「一人」（21.4%）になることで「ゆったり」でき「『ホッ』とできる」をイメージしていた。職員は、「ゆっくりとコミュニケーション」し、「子ども達と一緒に過ごし和める」ことを求めて、「子ども（職員）と共に」（50%）や「子どもの様子」（19.2%）であった。つまり、子どもに関わることで「『ホッ』とできる」ことをイメージしていた。

Y園の子ども達は、「居室」で「一人」（50%）になることによって、「自由にできる」、「静かだから」「ホッ」とでき、職員は、「同僚と共通の課題を話し、各々の意見を言いあっている」行為や「午前の仕事がひと段落したという安心感」を得るという「職員独自の行動/好きなことをする」（26.1%）や「ちょっとお茶をする時」の「時」（26.1%）をイメージしていた。

Z園の子どもたちも「絵を描く」などの「好きなことをする」（41.5%）ことと「一人」（24.1%）になることで、X園の子ども達とほぼ同じようにイメージしていた。職員は、「夕食時」、「子ども達が一日を終えて」とあるような「時」（32%）と「楽しく食事をとる」、「子どもと一緒にちょっとお茶をする」などの「子どもと共に」（28%）がほぼ同じ割合であった。

施設ごとの比較をすると、X・Z園の子ども達は「好きな事をする」で、Y園の子ども達は「一人」になることをイメージする傾向であった。また、X園の職員は「子どもと共に」や「子どもの様子」で子どもに関わる事を、逆にY・Z園の職員はそれ以外の仕事の終了の「時」（背後に心理的な安堵感）をイメージしていた。

### ４－４　写真とコメントによる分析―子ども達と職員の位置関係

子ども達と職員の関係づくりを考える時、子どもと職員の物理的・心理的位置関係が重要であると考える。それで、写真とコメントの内容を合わせてみてみると、①共に：子どもや仲間

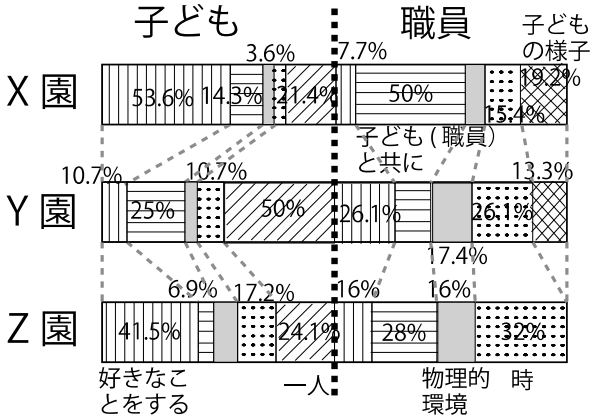


図４　「『ホッ』とできる」と「思われる」・「思われない」コメントの分類

と一緒に行動するなど、②見守る：子どもや仲間の様子を見守る、③離れて：職員の視点から、子どもから離れ、職員同士の会話を楽しみ、仕事の終了、安堵感など、④子どもの視点から「離れて」:「好きなことをする」と「一人」になる、⑤物理的環境：位置関係に属さないものという、５区分することができた。その一覧が図５である。

### ４－４－１　共に

職員と子ども達が一緒になって行動するイメージは、図５にある「共に」と分類されているコメントである。調査対象施設ごとにこの「共に」行動することをイメージした割合と場所をみると、Ｘ園が29人中10人（34.5%）居間・食堂８、居室１、風呂１、Ｙ園が26人中５人（19.2%）居間・食堂３、居室１、施設全体１、Ｚ園が24人中９人（37.5%）居間・食堂６、居室２、中庭１であった。

どの施設でも食事作りや食事風景、食後のテレビや遊び、また、おやつの時間などのみんなで同じ行為をし、会話をしているコメントである。それらには、「子ども達と一緒に過ごし和める」「子ども達とのふれあいの場所」「子どもと向かい合って美味しいあたたかいご飯を食べる幸せを共有できるから」（以上職員のコメント）とあり、職員は子ども達へ直接的な関わりを重視していることがコメントの中に見受けられる。

また、「あったかいし、団らんができる」「みんなでご飯を食べている時は、みんな一度は笑うから『ホッ』とできる」（子どものコメント）があり、子ども達も職員や仲間と団らんを求めていることが伺える。

これらの多くは「居間・食堂」での行為である。そこで展開される職員と子ども達の日常の中に、関係作りがなされているのである。共に食卓を囲む、食後の時間をゆっくり共有することができる「居間・食堂」が子ども達との関わりに重要な場所であり、「時」でもあることが伺える。さらに、「子ども達と少人数で入浴し、ゆっくりとコミュニケーションを図れ、身も心もホッとします。」（M園　指導員）とあるように、子ども達と一緒に浴槽に入りながら、ゆったりと少人数の子ども達の言葉に耳を傾ける時を大事にしているケース、「裸のつきあい」がみられた。「共に」の回答には職員のものが多く、子どもと関わろうとする姿勢がみてとれる。

### ４－４－２　見守る

「見守る」には、職員の視点のみの回答であった。調査対象施設ごとに「見守る」をイメージした回答者数と場所は、Ｘ園が29人中２人（6.9%）、居間１、園庭１、Ｙ園が26人中３人（11.5%）、食堂２、居室１、Ｚ園が24人中３人（12.5%）、居室２、事務所１であった。行為は子ども達の寝顔２、笑顔１、リラックスした表情１、遊ぶ姿１、おやつを食べている姿１、子ども達の声１であった。

コメントをみると、子ども達の遊んでいる声を仕事中聞いて「背中越しに子ども達や職員の声が聞こえてくると『ホッ』とした気持ちになる」（Ｚ園　事務員）、園庭で遊ぶ子ども達を見ながら、「利害関係がなく自然体のところが何とも言えない」（Ｘ園　新人保育士）、「素直で本能のままに感情として表れる状態がホッとする」（Ｚ園、指導員）、「午前の仕事がひと段落したという安心感、子どもの寝顔を見るとホッとする」（Ｘ園、保育士）というコメントから、職員が子どもの表情や仕草等の子ども達の姿を見守り、心が「『ホッ』とできる」という職員の存在が伺える。

### ４－４－３　離れて

「離れて」に当てはまるイメージを表現した割合をみると、Ｘ園が29人中２人（6.9%）、Ｙ園が26人中５人（19.2%）、Ｚ園が24人中１人（4.2%）であった。子どもから「離れる」に焦点を当てると、子ども達と同室の状況でも心理的に離れている関係「キッチンに居ることで子ども達とちょっと距離をとる」（Ｘ園　保育士）段階、さらに職場の施設をまさに出る瞬間、施設の玄関の扉を開けて、帰宅する姿の写真「施設の敷地外に出る瞬間、業務から開放されたと安堵できる」（Ｙ園　家庭指導員）、最終的に、施設から完全に離れた状況、仕事からの解放、

| | | 児童指導員 | 保育士 | その他・新人の職員 | 子ども達 |
|---|---|---|---|---|---|
| X園 29人 | 肯定 | キッチンからみた子ども達の様子 / 夕方～夕食後、子ども達が感情を出し合うことが多く、キッチンに居ることで子ども達と距離をとる<br>**離れて**<br>幼児室のこたつ / 子ども達と教育テレビを見て過ごすとのんびり、ホッと<br>子どもと入浴 / 子ども達と少人数で入浴ゆっくりとコミュニケーションを図れ、身も心もホッと<br>**共に** | リビング、子ども達がテレビを見ている姿、食卓で中高生と職員が会話 / みんながその日の出来事を話しながら自分の好きなことができているように思える<br>リビングでテレビを見ている子ども達の姿 / 子ども達と一緒に過ごし和める場所<br>リビングでテレビを見ている子ども達の姿 / 子どもと一緒にテレビを見て、子どもと話す<br>GH のリビングで子ども達とおやつを食べて会話の様子 / 児童と一緒におやつ等を食べて一息つけるから。また、昔話等をしているときも思ったりします。アルバムを見たり一緒に見る時等<br>自宅の自室 / 一番力が抜ける所<br>**離れて** | 園庭で遊ぶ子ども達の姿 / 利害関係がなく、自然体の所が何とも言えない<br>**見守る**<br>新館リビング・キッチン / 料理を作りながら、子ども達の様子を見る。子ども達のリラックスした表情、とてもホッと。<br>**共に**<br>キッチンで子どもと会話しながら料理 / 子ども達の顔を見ながら対話しながら、料理をするのが楽しい<br>本館リビング / 子ども達とのふれあいの場所<br>**共に**<br>**物理的環境** | リビングでゲームをしている姿 / 楽しい<br>自室で芸能人の写真を見ている姿 / 芸能人は大好き。なんかいやな時とかに見ると元気になれるし、安心。<br>自室で自分の写真を見る姿 / 自分の写真を見ているから<br>自室、机周り / 寝ることがリラックスできる。音楽を聞く、インターネットを見る<br>自室、ギターを引いている姿 / 暇な時、好きなことをするホッとする<br>自室で寝ている姿 / あたたかいし、ゆっくりできる<br>自室の机周り / おちつく、好きなことをする<br>**好きなことをする**<br>自室、机周り / 1 人だから<br>自室、ベッド / 自分の部屋、1 人でいれるから<br>自室で寝ている姿 / 1 人だから<br>トイレ / 静かだから、一人<br>トイレ / 1 人やから　トイレ / 一人になれる<br>**一人**<br>**共に**<br>リビングキッチン、料理している姿 / いろいろな話が職員とできるから。料理も一緒に作ることができるから<br>リビング、こたつ周り / あったかいし、団らんができる<br>風呂 / あったかくて一日が終わってホッと<br>学校の教室 / 太陽があたっていて |
| | 否定 | | | | |
| Y園 26人 | 肯定 | 幼児部の居室 / 大半の子が幼稚園に行き少人数で過ごせる<br>讃岐学園 / 仕事に追われることもあれば子どもと遊んでいる時は、仕事のことを忘れたりもする。一日の勤務の中で、意識的に「ホッとできる」と考えたり、思ったりしたことはない。良い意味で。<br>**共に**<br>**離れて**<br>小学校から学園までの坂道 / 慌ただしい中で、みんなが元気に朝起きて学校に登校。職員が途中まで送って行き、学園に戻る坂道。ホッとすると同時に朝日を浴びながら登る坂がすがすがしい。 | 子どもが昼寝している様子 / 午前の仕事がひと段落したという安心感、子どもの寝顔を見るとホッと<br>**見守る**<br>お茶を飲んでいる姿 / 職員室でちょっとお茶をする時子どもと一緒でも OK<br>職員室 / 仕事の後、同僚と共通の課題を話し、各々の意見を言っている時、自分と同じ気持ちで仕事をしているんだと思うとホッと。 | 食堂で子どもと食事している姿 / 子どもと向かい合って美味しいあたたかいご飯を食べる幸せを共有できるから、嬉しそうな子どもの顔を見れるし、いろんな話もできる<br>食堂で子ども達がおやつを食べている姿 / 作ったおやつを食べてもらっている時<br>食堂での食事の様子 / 自分が作った食事を職員を交えて和気あいあい食べているのを見るとホッと。<br>帰りの玄関の扉を開けた瞬間 / 施設の敷地外に出る瞬間、業務から開放されたと安堵できる<br>湯茶室のおけの中にタオルが入っている / タオル類を濯ぐ際、本日の業務もあと少しで終了し、あたたかいお湯の入った桶に手をつけていると、ホッとし、家に帰ってお風呂に入りたいなと思う<br>**離れて**<br>食品庫・厨房内 / 調味料や野菜・肉などの食材が自分の目で確かめられる場所にいると落ち着く。普段は事務所で仕事を行っているので、食材の状態や在庫、自分が考えた通りに調理が行われているかなどが、自分の目で確認できないのが不安に感じるので厨房内にいると、全てが自分の目で見ることができるので安心。ホッとする。<br>**物理的環境** | 食堂 / みんながいて安心できるから<br>談話室 / ゆったりできるし、みんなと話したり、遊んだりできる<br>**共に**<br>自室のベット周り / 静かでおちつくから<br>施設の庭 / 学校や外から帰ってきたときにホッとできるから<br>リビング / 静かにできるから<br>自室 / 部屋にいる時が一番ホッとする<br>ざくろ石 / とてもざくろ石がきれいだから、とてもいいから<br>**物理的環境**<br>自室で布団に入っている姿 / 侵入者が入って来れないから、安心して寝られる<br>自室 / 沢山人がはいって来ないし、なれてる場所だからホッとします<br>**一人**<br>部屋のドア / ゆったりできるし、自由にできるから、いろんなものをおいているから<br>自室のベッド / ベッドに寝ることで、嫌なときなどにホッとできる<br>自室 / 自分のしたいこととか考え事とかができてなんかおちつく。学校から帰ってきて、疲れた時部屋に入れば、なんかホッとする。「今日も一日終わったー」みたい。<br>**好きなことをする** |
| | 否定 | **離れて** | トイレ / 便座が冷たく、下に少し隙間があり、のぞこうと思えばのぞけるので、落ちついて用をたせない。音姫がついていれば、排泄中に周りが気にならなくて（Kaiojiyu） | **物理的環境** | 写真なし / 友だちの家におる時、素でおれるから楽<br>**物理的環境** |
| Z園 24人 | 肯定 | 夜のテレビの時間 / 夕食や入浴を済ませ、寝る前のテレビの時間にホッとする。業務を忘れてテレビを見ながら、「アーだコーだ」行っている時間が好きです。<br>中庭 / いつも子ども達とサッカーをする場所。子ども同士のけんかもありますが大人も子どもも無邪気に遊べる空間が好き。注：指導員の休憩室があればいいかなと思います。<br>**共に**<br>ちびっ子の笑顔 / 素直で本能のままに感情として表れる状態がほっとする。 | リビングで子ども達と一緒にお菓子を食べて会話している様子 / 子ども達一人ひとりが宿題や次の日の準備を終わらせ、職員もある程度の仕事が終わり、一つのテーブルを囲んで、お菓子や飲み物を食べ飲みながら何気ない会話をしている時<br>子ども達の寝る前の様子 / 子ども達が一日を終えて、寝る雨に絵本を読み聞かせをする時<br>幼児部屋で子どもを寝かしつけている姿 / 一日の仕事が終わり、幼児さんを寝かせつけている時間がホッとできます。「あとは、保育士室に入って、自分の時間が持てる。」と思うから。<br>幼児部屋で子どもが寝ている姿 / 一日の終わりに子どもとではあるが、仕事が無事終わり、ゆっくりできる（疲れがとれる）から | ホームの食卓を囲んでいる様子 / 特に夕食事、子どもの一日の様子を聞き、楽しく食事をとることがホットできるから、<br>**共に**<br>事務所の机 / 入職当初より事務所で仕事をしており、長い時間を過ごしているため。また、仕事中、背中越しに子ども達や職員の声が聞こえてくると「ほっと」した気持ちになるため<br>**見守る**<br>クルミの森 / 幼い頃の自分の遊び場だったから | 食卓での食事風景 / みんなでご飯を食べている時はみんな一度は笑うからホッとできる<br>リビングで小さいこと遊んでいる姿 / 小さい子と遊ぶ時や小さい子といる時が一番ホッとできるし、楽しい時間です。<br>保育士の A さんと / 一緒に居るとホッとする。<br>**共に**<br>ベッドに入っている姿 / 周りに人がいなくて静かでいいから<br>絵描きの道具が散らばっている食卓 / 自分の世界に入って、周りの人のことを考えないでいられるから。あと、ストーリーを考えるのが好きで、ストーリーをぶつぶつ言いながら描くから、一人で落ち着いて描けたら嬉しいと思います。個室がいい。<br>**一人**<br>自室に貼ってあるポスター / 自分の趣味のポスターを部屋にはっていて、それを眺めている時にホット<br>リビングの食卓 / 絵を描くことがホッとできる<br>スポーツしている姿 / 楽しいからホッとする<br>夕方のグランド / サッカーの練習をして、後から夕焼けを見るのが「ホッとする」<br>風呂 / 風呂がすきだから<br>**好きなことをする**<br>自室 / 自分のへやだから<br>学校からみる景色 / 晴れている時はすごくきれいで、いろんなことを考えられるから |
| | 否定 | | **見守る** | **物理的環境** | ホームの天井 / 天井が高すぎて寒々しい<br>自室 / 一つの部屋に 2 人いるから、けんかしたり、うるさくなったりして、まともに「ホッとできない」 |

図５　施設別「『ホッ』とできる」と「思われる」・「思われない」写真とコメントの分類

写真はないけれど自宅の自室をあげ、「一番力が抜ける所」（Ｚ園　保育士）という３段階の「子どもから離れる」のイメージがコメントから伺える。

一方、「一日の仕事が終わり、幼児さんを寝かしつけています。『あとは、保育室に入って、自分の時間が持てる』と思うからです。」（Ｘ園　保育士）や写真は寝かしつけている幼児の居室の様子で、自分の机がある保育室に戻ることが一日の仕事の終了、安堵感をコメントしている。また、「一日の終わりに子どもとはであるが、仕事が無事終わり、ゆっくりできる（疲れがとれる）」（Ｚ園　保育士）、これも「安堵感（仕事の終了）」を示している。

そして、Ｙ園の保育士が職員室で「仕事の後、同僚と共通の課題を話し、各々の意見を言っている時、自分と同じ気持ちで仕事をしているのだと思うと「『ホッ』と」というコメントがある。職員同士での話し合いの中で、共通認識が確認でき、仕事に対する自身を得たことが示されている。

### ４－４－４　「好きなことをする」・「一人で」

子ども達の視点からの「離れて」には、「好きなことをする」と「一人」に分類した。Ｘ園の子ども17人中「好きなことをする」７（41.2％）・「一人」６（35.3％）、Ｙ園は13人中、同３（23.1％）・２（15.4％）で、Ｚ園は14人中、同５（35.7％）・２（14.3％）であった。これらは、施設内での自身の自由な行動をしているコメントである。例えば、子ども達の「好きなことをする」は「自室」での過ごし方であり、行為である。「一人」は、「侵入者が入って来ないから安心して寝られる」（Ｙ園　子ども）、周りに人がいなくて、静かでいいから」（Ｚ園　子ども）というコメントは、子ども達の他者に邪魔されたくない、自分の空間で自由に好きなことをしたいという意思がみえる。さらに、「学校から帰ってきて、疲れた時部屋に入れば、なんかホッとする、『今日も一日終ったー』」（Ｚ園　こども）という安堵感を示すコメントもある。

### ４－４－５　物理的環境

写真、コメントに、職員と子ども達との物理的・心理的位置関係が見て取れない回答である。Ｘ園の風呂の写真で「あったかくて一日が終わって『ホッ』と」というコメントの子ども１、Ｙ園の否定的回答の職員１と自分の部屋やベッドに横になっていると「『ホッ』とする」、好きなものの写真・コメント、「静かにできる」「居間」などの子ども６、そして、Ｚ園は否定回答２を含み子ども４であった。

その中に、施設外の景色を写真にし、「いろんなことを考えられる」というコメントで自然との対話で「『ホッ』とできる」とした子どもがいた。

### ４－４－６　まとめ

以上のような子ども達と職員の位置関係の分類を施設毎に職員と子ども達の結果を比較してみる。

子ども達は、「物理的環境」の多かったＹ園を除いて、Ｘ園とＺ園の子ども達が「『ホッ』とできる」イメージを、「好きなことをする」ことと「一人」でいることに重ねていた。そして、職員は「離れて」・「見守る」が多いＹ園を除いて、Ｘ・Ｚ園は『ホッ』とできる」イメージを「共に」であった。このことから、施設のあり方・ケア形態の違いがみえてくる。

また、子ども達には、他者がいない「一人で」いることができる空間「居室」の必要性が明らかになった。一方、職員は、一日の仕事がまもなく終り、「自分の時間が持てる」という仕事からの解放の時や職員同士のコミュニケーションができる時、「職員室でちょっとお茶をする時」（Ｙ園　保育士）、「指導員の休憩室があればいいかなと思います。」（Ｚ園　指導員）というコメントから伺えることは、職員は、ほんの短い時間でも、子ども達から「離れる」ことで、しばしの「『ホッ』とできる」時と空間（職員室、休憩所）が必要とされていることが明らかになった。

## ５　まとめと課題

### ５－１　まとめ

本研究では、児童養護施設における子ども達と職員の関係づくりのしやすい養育環境のあり方を明らかにするために、３施設の子ども達と職員を対象に、それぞれの居場所を表す「『ホッ』とできる」という言葉のイメージを問う調査を行い、以下の知見を得た。

１）「『ホッ』とできる」場所のイメージ：施設の差は多少あるが、子ども達は「『ホッ』とできる」場所を自分の趣味など「好きなことをする」ために、「一人になる」ことができる自分の部屋「居室」をイメージしいていた。

職員は「『ホッ』とできる」場を、食事、テレビを見る、日常の行動を「子ども達と共に」する空間「居間・食堂」をイメージしていた。が、Ｙ園の職員はそれ以外の場「施設内の他の空間」をイメージしていたことが他の２園と異なっていた。

また、以下の「一日の勤務の中で「『ホッ』とできる」と考えたり、思ったりしたことはない。良い意味で」というコメントもＹ園の職員で、仕事に集中していることが伺える。図１、表１のようなケア体制・環境の違いが一因すると思われる。

２）子ども達と職員の位置関係を写真とコメントから分類（①共に、②見守る、③離れて、④好きなことをする、一人、⑤物理的環境）すると、子ども達は④の「一人で」「好きなことをする」ために、それが可能な、また、Ｚ園の子どものコメント「個室がいいね」に代表される「居室」を「『ホッ』とできる」場所としてイメージしていた。

そして、職員は、日々の子ども達との生活の中で、子ども達との関係づくりを念頭に、①の子ども達と「共に」行動することをイメージしていた。子ども達への関わりがしやすい時・場所として「居間・食堂」や就寝時の子ども達の居室等が「『ホッ』とできる」場所としてイメージしていた。

３）関係づくりは、施設形態の差に関係なく共に生活する中で生まれてくる、職員も子どもも一緒になって時を共有することが子ども達との関係作りに欠かせないことが伺える。

そして、コメント「大半の子が幼稚園に行き、少人数で過ごせるから」（Ｙ園　指導員）や「子ども達と少人数で入浴し、ゆっくりとコミュニケーションを図れ、身も心もホッとします。」（Ｘ園　指導員）のように、少人数であることの指摘もあり、子ども達との関係づくりにも少人数であることが必要であると考えられる。

### ５－２　今後の課題

子ども達と職員の関係づくりのしやすい養育環境のあり方を明らかにするために、写真やコメントから具体的に示すことができた。今後は、より多くの資料の収集をはかり、施設形態だけでなく、職制の違いからも分析を試みるつもりである。また、本研究では、「『ホッ』とできる」のみの分析であるが、他の概念の調査も行っているので別の機会に発表を試みたい。

（謝礼）

本調査にご協力くださった施設の施設長、職員、子ども達に感謝申し上げたい。また、本調査は日本学術振興会平成22年度科学研究費補助金奨励研究第22920015による。

【注】

（注１）参考文献１。集団主義養護は、集団生活の中でこそ子ども達は互いに育ちあって豊かな社会性が育まれるという考え。「集団は個のため、個は集団のため」という社会主義的な協同理念がバックボーンにあり、また高度成長の中でマイホーム志向に傾いていく家庭教育への危惧や批判が背景にあった。施設での集団養育は家庭での子育てに勝りこそすれ劣らない、それを解体するなどとんでもないと強く主張されたのである。

（注２）社会保障審議会児童部会「社会的養護のあり方に関する専門委員会」報告書　2003. 10

（注３）参考文献３。社会化は、社会学のみならず、心理学、特に児童心理学あるいは発達心理学においても重要な研究テーマとなっている。子どもの発達は、社会的働きかけという社会的な視点からみると、他者との社会的相互作用による自我意識の斬新的な形成過程として捉えることができる。

子どもの発達の社会的過程は従来、社会化（socialization）の概念で研究がなされていた。

（注４）参考文献12。写真投影法は、10年以上前に野田正彰氏が「漂白される子どもたち」という本の中で紹介されていた手法で、小学生の子どもたちにカメラを持たせて自由に何枚も撮らせてくる。撮ってきた写真を分析して、子どもたちの生活を明らかにした。

（注５）注４の写真投影法を応用したもので、抽象概念を提示した場合に撮影された写真とそのように感じた理由のコメントを分析することにより、撮影者の保持する考えを考察する研究手法である。文13で同じ調査手法を使用した。

**【参考文献】**

（１）滝川一廣：心の科学　137　日本評論社　pp.16−17（2008）

（２）　住田正樹:子どもの発達と地域社会　九州大学出版会　pp.14（2001）

（３）　住田正樹：子どもの仲間集団の研究　九州大学出版会（1995）

（４）Cooly, G.H. Sucool: Social Organization: a study of the larger mind., 1909s（Charles Scribner's Sons, 1929, copyright 1956 by the Free Press）（大橋幸・菊池美代志訳　『社会組織論』青木書店　pp.24−31（1970）

（５）出野美那子：児童養護施設における青年前期の子どもの愛着状態と心的外傷症状　発達心理学研究　Vol19　pp.77−86（2008）

（６）坪井裕子：虐待を受けた子どもの自己評価と他者評価による行動と情緒の問題　教育心理学研究　vol55　pp.335−346（2007）

（７）永井亮：人権回復の場としての児童養護施設の課題　ルーテル学院研究紀要　No41　pp.67−80（2007）

（８）坪井善正：養護施設の類型化に関する基礎研究　その１−２　日本建築学会計画論文集　No370　pp.22−32（1986）／同No376　pp.66−75（1987）

（９）杉本範子：グルーピングが要養護児童の「居場所」に与える影響　日本建築学会計画論文集　No630　pp.169−1697（2008）

(10) 杉本範子：小舎制児童養護施設における改築による子ども達の居場所と交流への影響　日本建築学会計画論文集　No645　pp.2339−2345（2009）

(11) 杉本範子：児童養護施設で働く職員のみる養育環境に関する研究　日本建築学会計画論文集　No654　pp.1865−1872（2010）

(12) 野田正彰：漂白される子供たち―その眼に映った都市―　情報センター出版局（1988）

(13) 住宅総合財団助成研究「福祉施設における『ふつうの暮らし』の環境的条件に関する研究　代表者　大原一興（2008）